

山 柿

大 浜 巖 比 古

以下稚時不_レ涉_三遊藝之庭_一。横翰之藻自_レ乏_三乎彫蟲_二焉。幼年未_レ

(イ)山柿之門_一。裁歌之趣詞失_三乎_二(ロ)林_一矣。(原文(イ)は至にシンニヨウ、(ロ)はクサカンムリに聚)(万、卷十七、三九六九前文 家持)

右の文中の「山柿」が何人を指すかに就いては論の紛糾して定説を定め難い所であるが、この点に就いていささか私見を述べてみたい。

興味のあるのは、この論争が、いわば長い万葉批評史に関つてい

る点である。
「山」を赤人とする説は、遠く古今集序文に始まり、近世末に篠舎漫筆の張紙があらわれる迄は、なんら異を挾まれることなくうけつがれ来た考え方であった。これは平安時代に於ける三十六人集に、万葉歌人では人麿集と赤人集と家持集とがあること、勅撰和歌集に赤人の歌五十首に対して憶良は五首にしか過ぎないことなどに見られる如く、万葉を人麿、赤人、家持で代表する見方が長く続いたのに対し、近世末期の合理精神は新に憶良を重んずる見方を生み出し、万葉集を代表する歌人に憶良をも加える傾向を持って来た。

山 柿 (大浜)

この機運は「山柿之門」に就いても、人麿・赤人に対し人麿・憶良であるとする見解を持たしめるに至った。いわば、長い伝統主義に對する合理主義の反撥とも見られるのである。

併し今ここで、山柿論の展開の跡を辿る余裕はない。極くかいつまんで、そのあらましかだけ述べておこう。

明治四十一年佐々木博士は「歌学論叢」に篠舎漫筆卷四、歌聖の條の張紙

此山柿の柿は柿本なる事は論なし、山は山部赤人とのみ申伝へ侍れども、若くは山上憶良などにはあらずやとも思ひ侍り、さるはかの長歌のよみ口のけぢめ聊か侍るやうなり。

とあることを報告し自らも憶良説の論拠を示された。併しこの段階に於いての論の中心は歌人としての赤人、憶良優劣論であり、島本赤彦、中村憲吉、窪田空穂、中河与一等主として歌人の側からの反對を受けた所に特徴があり、山柿研究の第二段階といえよう。

第三段階は、憶良説の久米常民氏と赤人説の久松博士に代表されよう。久米氏の説は井乃香樹、風券景次郎、久松博士の諸氏によつて反駁されたが、同じ頃森本治吉博士も憶良説を主張し、更に全註

釈もこれに従い、近くは吉井巖氏に至る迄憶良説は存続している。この論争は遂に歴史家の側からの参加を見、北山茂夫氏は赤人説をとっている。また早くには折口博士に人麿一人説があり、小島憲之氏はこれを承けた。高木市之助氏は、別に先人説を唱え論争は益々拡大されていった。

併し論の争点は、やはり赤人か憶良かにつきよう。その主張する所の要約を、吉井巖氏の万葉集大成訓詁篇に借る。

赤人説の論拠

- (一) 人麿と並称されるべき歌人は赤人なり。
- (二) 赤人と家持は歌風に親近さを持つ。
- (三) 赤人は家持に尊敬され推賞されている。
- (四) 憶良ならば、家持は幼時入門し得た。
- (五) 赤人は中央歌人であり、憶良は然らず。
- (六) 家持は白鳳的伝統に憧れ、その伝統のうちに歌う宮廷歌人人麿赤人に倣った。

憶良説の論拠

- (一) 憶良への追和の作が家持にある。
- (二) 越中守家持と筑前守憶良の境遇の類似。
- (三) 漢文の序並びに文章を附するは憶良模倣。
- (四) 大伴家と憶良とは親しい関係にある。
- (五) 憶良も亦中央に聞えた歌人である。
- (六) 文中の(四)林は憶良の類聚歌林をさす。
- (七) 赤人の長歌は未熟で、家持がこれに師事したとは思われない。
- (八) 家持は憶良の詞句素材の多くを得ている。

併しながらこの論争の興味をひくのは、それぞれの論者の主張する所よりも、それが論の紛糾をよんだという点にある。右の論争の要約を比較してみても、赤人説の主張をみるならば、

- (一) これは観点をどこに置くかで異なる。即ち古今序に始まる平安歌人の見方からすればそれでよからうが、久米氏の如く平安歌人の万葉認識の浅さ暗さを主張すれば反駁され得る余地を残す。また現代万葉観から見ても、その享受の仕方、批評の立場の相異から相方共自己の立場を主張し得、結局赤人憶良の優劣論に終始するのみである。

- (二) これも論者の主観によって動揺する。
- (三) 同様の事が憶良に就いても云えること(二)と同様である。

- (四) この点は赤人説の一つの強い論拠であるが、久米氏はこの前文の解釈の仕方を楯にとってなお憶良説を主張して止まない。

- (五) 憶良も亦中央歌人として認められるべき力量と時期を持っていた、その事実があるとの反駁がみられる。

- (六) これは前の中央歌人説と相関聯するが、宮廷歌人の性格なり時代性なりが適確に把握されない限り憶良説側の納得をかちうる事は出来ない。

一方憶良説の論拠に就いてみれば、

- (一) これが直ちに赤人否定の論拠とはなり難い。
- (二) この境遇の類似は極く一部であり、而も外見的類似にすぎない。
- (三) 模倣即影響、影響即山柿という論の運びには飛躍がある。
- (四) この事は前文と矛盾する。
- (五) これは両説とも主張し得る。

(六) 確定的な決め手はない。

(七) 家持自身が赤人の長歌を未熟と見たかどうかは分らない。この見方こそ憶良説を主張する側の現代的見方であると批難されても仕方がない。

(八) これは(三)と共に考えられることであるが、作品上の影響と作家の影響とを常に等値で結ぼうとする点に問題がある。詞句素材の類似・模倣が即ちその作家の志向する処と同じとは常には云えまい。人麿を志向して憶良の詞句を模倣転用する事もあり得るといふ事は考慮されねばならない。

の如き批判の余地があり、これでは所詮水掛論に終るものと言わねばならない。それでは、何故この様になったのであろうか。この点に就いては、近く而も歴史家の側から表われた北山氏の論がその原因を暗示しているものと言えよう。

即ち、北山氏は、白鳳と天平との時代的性格（それは主として政治史の立場に立っているが）の相異から、旧族大伴氏の氏の長家持の立場を究明し、その立場に於いての歌人家持の創作意欲を抽出することによって、家持の時代と人麿・赤人の時代との断絶を説いた。図らずも家持と宮廷歌人との「作品と時代」の相違をつき得たのであった。

このことは、それ迄の歌人、国文学者の誰も意図しなかった所であり、又それら諸論の欠陥をつき得て妙であった。即ち、ことの紛糾は、従来の論者達がこの問題を論ずるにあたって、史的立場に立つ用意を忘れていた事に端を発していることを反省せしめたのである。

久米氏は殊にこの立場に強く立った。理由は古今序の否定の為

に、平安歌人の万葉観を、この問題の討議の場から閉め出す為にあった。最近の吉井巖氏に至る迄この傾向は避けられていなかった。「それはこの語（山柿之門）が三六九二→三九六五→三九六九という一聯の作歌過程の中で述べられており、先ずこの場を離れずに解釈するべきである。ということである。その解釈が、家持の全般的歌風の特徴から結論されることは、当時の家持の意識を越える恐れがあるからである。」（傍線筆者）という考え方である。

久米氏は、平安歌人の誤った万葉観の否定を主張するに急のあまり、万葉時代の枠内での「作品と時代」の史的把握を忘れ去った。そうして憶良も赤人も同じ時代の歌人としてその優劣を論じ、人麿赤人の時代と憶良家持の時代との断絶を看過して了った。

吉井氏は創作時に於ける家持の意識に拘泥するのあまり、万葉の流れに於ける家持の作品の位置づけをやゝ近視的見方に於いて為すに至った。

併しながら、北山氏以前の論者はさておき、以後の論者吉井氏が北山氏の説を知りながらも、而もある点に於いては一致した見方——何れも越中守当時の家持が後向きの姿勢であったという見方——をしているにも拘らず、北山氏はそれを白鳳（及びその流れにある神亀・天平初年迄）への憧憬まで遡らせ、吉井氏は僅かに太宰府の旅人憶良の文人風雅への関心までとどめてしまったのは理由がある。ことは万葉の問題であり、文学の問題であった。北山氏はその史的考察によって究明し得た家持の胸中を、具体的に文学の場迄持出し得たら、吉井氏と雖も納得したであろう。併しそのこと迄史家北山氏に望むべきではない。ことはここから、文学史の問題に入ってくるのである。小論の目的もここにある。

宮廷歌人は赤人に於いて断絶した。人麿以後の宮廷歌人には笠金村、車持千年、山部赤人等が見られるが、人麿の追隨に止まった金村や没個性の千年に比べて新たな境地を開き得た赤人の力量は、家持にしても容易に理解し得た筈である。神龜三年九月十五日播磨国印南野行幸供奉の歌が、宮廷歌人としては最後のものである。天平八年六月吉野離宮行幸の際の赤人の歌は「応詔歌」であり、久松博士の言われる如く、既に赤人は宮廷歌人としての職掌から離れていたのであろう。というよりも私は、その頃を以て万葉の宮廷歌人の役割は終りを告げたものと見てよいと思っている。それならば宮廷歌人とは一体何であらうか。

宮廷歌人の発祥は、現人神思想と共に始まる。抑々歌は（殊にも公の場で歌われる雑歌は）本来神々への献歌として始まった。開卷第一の雄略天皇の御製は、農業祭の先頭に立った頃の天皇の姿をうかがわせる。二番の舒明天皇の御歌も、国見という重要な農事に際しての天皇の国ばめ歌である。この時代の天皇は諸豪族の上に立つとはいえ、未だ自らが神として歌を献げられるには至っていない。

大君は神にしませば赤駒の腹飼ふ田井を都となしつ　さる（大伴御行）

壬申の乱後、諸豪族ひとしく渴望した政治的統一と安定は、始めて天皇の前に天皇を「神」として、そこに神に奉るべき歌を、現身の前に捧げしめているのである。万葉に表れた宮廷歌人的なものの嚆矢である。その背後には「歌男歌女」を諸国から召し出した天武紀の記事がある。諸国の歌を朝廷に献ぜしめたのは、単に歌舞を好んで盛んにせしめたとのみみるべきではない。諸国の歌は諸国の神

神への献歌にこれを発している。それを天皇の前で歌わしめることは、諸国の神々の上に、現人神天皇を位置づけることに他ならなかった。天武の皇親政治は、このような精神によって支えられていたのである。

併し万葉集に現れるところでは、天武の朝には、未だ宮廷歌人の職掌化されたものは見られない。それは今の御行の歌が、その歌の性格と歌品の凡ならざるにも拘らず巻一・二の編纂から除外されていることによつてうかがわれる。

藤原宮の創建は、天武の遺業をまっすぐに承け継ぎ発展せしめた古代国家の極盛期であった。持統は現人神天武をそのまゝに承け継ぎ「山川もよりて仕ふる神の御代」を顕現したのであった。「歌男歌女」を背景とした、大伴御行的なものの発展の上に柿本人麿的なものが要請されるのも亦当然であらう。統紀巻二「文物の儀、ここに於いて始めて備れり」にその盛容を積極的に荷いそれに寄与したものの中に人麿の姿を確認するという北山氏の言は味わうべきである。ここに「宮廷歌人」の「姿」を吾々は想い描けないであらうか。

藤原貴族の興隆は、深く天皇勢力と結びつつもこれを索制する力も強かった。白鳳への回帰を希った、聖武もこれは如何とも為し得なかった。遂には大仏の建立に象徴される仏道へのひたすらな帰依は、天皇を現人神としての地位から下らしめるに至つて了った。諸豪族、諸官人の前に現実にさう信じられた現人神天武・持統の姿を天平の人々は聖武に再び仰ぐことは出来得なかった。現人神思想と共に生れた宮廷歌人が、その思想の衰退と共に宮廷から消えてゆくのも亦当然と云わねばならないのである。

官制に宮廷歌人という職掌を見得ないからといって、その性格を面き得ないものでもなからう。「宮廷歌人などという未だ十分その社会的意義や存在の確かめられぬ概念」と吉井氏は言うが、私には右に述べた所によつてその姿をはつきりと面き得るのである。

その様な宮廷歌人は、憶良とは全く異質のものであった。それは歌人としての性格の上からも、また時代の上からも。そしてそれは赤人に於いて断絶した。それならば、その断絶を隔てた家持の側から、彼岸の人麿赤人の作品は如何に位置づけられるべきものであつたらうか。家持にとつて、その彼岸のものは古典にはかならなかつた。今や「山柿」の語は「古典」の語に置きかえられるのである。

憶良はそれに比して、家持の意識の中では同時代の歌人であつた。同時代の優れた先輩であつたのである。

文学上の影響を素朴に二分することが出来る。一つは古典からの影響であり、一つは同時代の作家からの影響である。家持は古典として人麿赤人に憧れそれに学んだ。先輩として、多く坂上郎女と憶良に学んだ。前者は古典からの影響であり、後者は同時代の作家からの影響である。このことを混同してはならない。

吉井氏は、三九六二→三九六五→三九六九の作品形成の上に憶良がずば抜けて大きな影を落していることを指摘して、それを憶良論の強いよりどころとしている。その指摘は、その点に限っては誠に正しい。併し「山柿」の語が三九六九の前文にあるからこの場を離れずに解釈すべきだとして、その事から「山」を憶良だとするのは如何か。それならばここに「山柿」の「柿」は不要であらう。ここでは、日頃古典としての「山柿」の風を理想のものとして憶がれ

てはいるが、不幸後世に生れた身には幼年にもその門に至るを得なかつた、為に裁歌の趣詞に乏しい、(そこで実際には我々のふだん尊敬している憶良先生にならつてこの歌を作つてみた)というくらいにとるべきだと思う。

池主にしても、現代の我々が指摘し得るこの作品の憶良の影響は、憶良が当時優れた歌人として認められていればいるだけ容易に知り得たであらう。それならば、この二人の間で「山柿」の「山」を憶良とするのは無意味である。それが赤人であるからこそ、「いやなかなか古典に劣らぬ立派なものですよ」との次の池主の書簡「山柿詩泉比此如蔑」が生きてくるのである。

従つてこの作品が憶良の影響を受けている点を強く指摘されればされるだけ、却て「山柿」の「山」は憶良から遠ざかつてゆくことになるのである。

なおいうならば、伊藤博氏も云っている如く、旅人憶良は、人麿伝統の倭歌の倚傍性を防がんとして大陸渡来の文学の移入を試み新風を企図した歌人達であつた。白鳳精神の衰退と共にみるみる張りを失つていった倭歌は、大陸文学に洗れた旅人憶良の眼にはたしかにみすばらしく映つたことであらう。旅人憶良の新しい努力も、極めて必然的なものであつた。断絶は、彼等の眼前で為されたのであつた。だが果して、このことが白鳳宮廷精神の衰退によることを彼等が意識したかどうかはわからない。併しながら家持は、白鳳の遺風を最後までとどめようとした唯一の名門旧族の長であつたが故に、又錯綜した政治的紛争の渦中にあつたが故に、更にはその守旧的な資質の故に、はた又時期的には断絶から若干の距離を隔ていたが故に、却てよく意識し得たのではなかつたであらうか。「山柿

之門」の語に私はそれを読みとろうとするのである。

確かに作品の上で我々はこの山柿の時代と、憶良家持の時代との断絶を指摘し得る。いま暫く問題の「前文」から離れて、広い万葉集の中でこの操作を試みよう。

吉井巖氏に秀れた労作「反歌序論」がある。それは反歌の集中の記載様式を克明に検討することから出発して、反歌が従来考えられて来た様に、大陸渡来の乱乃至反辞の輸入によって始まったものでなく、日本古来の歌謡が長歌・短歌のジャンルを生みそれを完成してゆく過程に於いて、長短両様式それぞれの表現特色が把握され、その両機能の組合はせによって新しい表現様式が発明されたのが長歌・反歌であること。従って人麿乃至赤人にあつては、長歌と反歌は主従の関係ではなくそれぞれ独立して相対応するものであり、反歌は長歌の主想と相関聯しつつも、それとは従属的關係にないところで新な発想を持っている事。併し後期万葉を代表する家持にあつては、大陸の反辞へそれは前詩の補遺、反復、要約の影響を受けて、反歌も亦前長歌の補遺、反復、要約として発想されている事。従って家持のこの種の作品をみるに、長歌・反歌は何れも主・従の關係にあり、従である反歌は長歌にもられた内容に制約され、それから一步もはみ出していない事。これは家持の時代にあつては、既に長歌・反歌様式の発生と発展の過程は忘れられ、形式のみが残り、その形式の解釈を逆に大陸の文学様式から判断して、それに従つて実用したのである事、等を論じている。

この事は人麿・赤人の時代と憶良・家持の時代の差を示すのに役立て得る。

短歌様式は万葉初頭の完成以後幾多美意識の変遷を重ねたとはいへ、その形式はいささかの變遷もみなかった。それに反して長歌・反歌様式は人麿・赤人の隆盛期を過ぎるとともに早くも衰微を見せてくる。これには種々の原因が考えられるであろうが、その一つの大きな原因として、その発生から完成までの必然性が、早くも万葉後期に於いては忘れられていたことが考えられる。既に文学様式の面に於いても、一つの断絶を見るのである。完成されたものの後に断絶が来る時、それはもはや古典でしかあり得まい。人麿・赤人と憶良・家持との時代の差はここにはっきりと区別し得るのである。家持はその長歌作製にあたって、形式的には人麿・赤人伝統の古典に学び、同じ長歌・反歌の様式に従ったが、その様式をうらづけるものには遂に至り得なかった。従つてその技術は、近い憶良に学ぶより以外に道はなかった。形式の規範は古典に、内容の技術は同時代に——これは文学作品形成の常道であり、家持と雖もその例外ではありえなかつたのである。

念の爲、彼等の作品の一例をあげて、同じ様式のうちにも、今いった相違の点のあることを認識していただく。

輕皇子宿于安騎野二時柿本朝臣人麿作歌

やすみしし 吾が大王 高照らす 日の皇子 神ながら 神さび
せすと 太しかす 京をおきて 隠口の 泊瀬の山は 真木立つ
荒山道を 石が根 禁樹押靡べ 坂鳥の 朝越えまして 玉限る
夕さりくれば み雪ふる 阿騎の大野に はたすゝき しのを押
靡べ 草枕 旅やどりせず 古へ念ひて 云

短歌

阿騎の野に宿る旅人打靡きいもぬらめやも古へ念ふに 云

真草茹る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君がかたみとぞ来し
東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ
日なみしの皇子の命の馬並めて御狹立たしし時は来向ふ

山部宿祢赤人望三不尽山二歌一首并短歌

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高
嶺を 天の原 ふりさけみれば 渡る日の かげもかくろひ 照
る月の 光も見えず 白雲も いゆきはばかり 時じくぞ 雪は
ふりける 語りつぎ 言ひつぎゆかむ 富士の高嶺は

反歌

田児の浦ゆ打出てみれば真白にぞ富士の高嶺に雪はふりける

老身重病経年辛苦及思児等二歌七首 長一首、短六首（憶良）

たまきはる うちの限りは 平けく 安くもあらむを こともな
く もなくもあらむを 世の中の 憂けく辛けく いとのきてい
たき傷には からしほを そそぐちふが如く 益々も 重き馬荷
に うは荷うつと 言ふことの如 老にてある 吾が身の上に
病ひをと 加へてあれば 昼はも 歎かひ暮し 夜はも 息づき

cf. 899. 900. 901. 902. 903

あかし 年長く 病みし渡れば 月累ね 憂ひさまよひ ことは
ことは 死ななと思へど 五月蠅なす さわく子供を うつてて

868.jp

死にはしらず 見つつあれば 心はもえぬ かにかくに 思ひわ
らづひ ねのみし泣かゆ

反歌

慰むる心はなしに雲隠り鳴きゆく鳥のねのみし泣かゆ
すべもなく苦しくあれば出ではしりいななと思へど子等にさやり

ぬ 899

富人の家の子供の着る身なみくたし棄つらむきぬわたらはも
あらたへの布衣をだに着せがてにかくや嘆かむせむすべをなみ

901

水沫なすいやしき命も栲縄の千尋にもがとねがひ暮しつ
しづたまき数にもあらぬ身にはあれど千年にもがとおもほゆるか
も 903

述三恋緒二歌一首并短歌（家持）

妹も吾も 心はおやじ たぐへれど いやなつかしく 相見れば
とこはつはなに 情ぐし めぐしもなしに はしけやし 吾がお
く妻 大王の みことかしこみ 足引の 山越え野ゆき 天離る

cf. 3979

夷治めにと 別れ来し その日のきはみ 荒たまの 年ゆきがへ
り春花の うつろふまでに 相見ねば いたもすべなみ しき妙

cf. 3980. 3981

の 袖かへしつつ ぬる夜おちず 夢にはみれど うつつにし

ただにあらねば 恋しけく 千重につもりぬ 近からば 帰りに
だにも うちゆきて 妹が手枕 さしかへて 寝ても来ましを

玉ぼこの 道はし遠く 関さへに 隔りてあれこそ よしゑやし
よしはあらむぞ ほととぎす 来鳴かむ月に いっしかも はや
くなりなむ 宇の花の にはへる山を よをのみも ふりさけ見

cf. 3982

つつ 近江路に いゆきのりたち 青丹吉し 奈良の吾家に ぬ

え鳥の うらなげしつつ した恋ひに 念ひうらぶれ 門に立ち
夕占問ひつつ 吾を待つと なすらむ妹を あひてはや見む

3978

あらたまの年かへるまで相見ねば心もしのに念はゆるかも 3979
 ぬばたまの夢にはもとなあひみれどただにあらねば恋ひ止まずけ
 り 3980

足引の山来隔りて遠けども心しゆけば夢に見えけり 3981
 春花のうつろふまでに相見ねば月日よみつつ妹待つらむぞ 3982

最後に附言すれば、この長歌・反歌様式の形成から衰頽までの期
 間が、宮廷歌人の出現と終末に符合していることは興味深い。現人
 神信仰に支えられた皇親政治は白鳳の宮廷歌人を生み、その宮廷歌
 人は莊重雄渾、謹嚴端正な長歌・反歌の表現様式を完成した。白鳳
 への回帰を希いつつもついに貴族政治の跳梁を許した天平以降は、
 現人神信仰の衰退と共に宮廷歌人の姿を消滅せしめ、彼等の歌いあ
 げた長歌様式の真の倭風を忘れさせるに至った。長歌の早急な衰退
 も故なしとしない。万葉時代に於ける、文学史と政治史との符合は
 注目すべきことといわねばならない。(一九五七・九・一七)
 △原稿は歴史的かなづかい▽

受贈雑誌(その二)

- | | |
|----------|------------------------------|
| アカデミア | 14輯—18輯(南山学会) |
| 解釈 | 第二卷 七、八号(解釈学会) |
| 国語国文学報 | 第六集(愛知学芸大学国語国文学会) |
| 国語シリーズ | 29—35(国立国語研究所) |
| 国文 | 第七号(お茶の水女子大学国語国文学会) |
| 国文学 | 一卷四号—二卷一号(学燈社) |
| 国文論叢 | 第五号(神戸大学国語国文学会) |
| 女子大文学国文篇 | 九集(女子大文学会) |
| 人文 | 七号(西京大学) |
| 人文論究 | 七卷三—四、八卷二号(関西学院大学人文学会) |
| 聖心女子大学論叢 | 八一—一〇集(聖心女子大学) |
| 逐次刊行物目録 | 昭30、31年版(国立国会図書館) |
| 日本文学 | 八号(東京女子大日本文学研究會) |
| 日本文学 | 四七—五六号(日本文学協会) |
| 日本文芸研究 | 八卷二号(関西学院大学日本文学会) |
| 文学研究科紀要 | 第二輯(早稲田大学大学院) |
| 文芸研究 | 二四—二六集(日本文芸研究会) |
| 六浦論叢 | 五、六輯(関東学院六浦学会) |
| 立命館文学 | 132.134—145.147号(立命館大学人文学会) |
| 論究日本文学 | 五、六号(立命館大学日本文学会) |
| スバル 総目次 | 岩城之徳編(北星学園女子短期大学紀要
第三号抜刷) |